

シーン 8

ホワイト凌辱…耐久おちんぼ奉仕　ホワイト視点

「どうしようか、これ？」

「うーん、いろんなところから体液垂れ流しでだらしないなー、まあ十分楽しんだから適当に洗脳して構成員にでも……」

「ま、待ってください！？」

「え、どうしたのホワイト？」

「話が違います……」

これでは何のためにレッドさんが頑張ったのかわかりません。せめて私が頑張らないと。

「そうかな？　もともとはボク達のご褒美で2人を好きにできる時間をもらったんだから。飽きたら、終わりで問題ないと思うけど」

まるで、壊れて興味のなくなったおもちやをごみ箱に捨てるような目でレッドさんを見ています。

「わ、私がレッドさんの代わりに……」

「うん、もちろん、レッドを処理し終わったらホワイトの番だよ？」

「そ、そんな……」

「レンちゃん、レンちゃん」

「どうしたのノノ？」

「こういうのは……ごによごによ」

「ふんふん……あ、それおもしろそう」

「じゃあ、今度はそれで」

「ふふふ、さっき出したのにもうおちんちんが硬くなっちゃった」

「それじゃあ、ホワイトはレッドを助ける代わりに何でもやるってことでOK？」

「つく、ええ、レッドさんに手を出さないなら……どんなことでも」

「あはは、レッドがこんなになつたのに強気だな。それじゃあ、ホワイトもボク達をいっぱい楽しませてね」

「ひゃ！？」

ブルーさんが後ろに回り込み、私の、あ、あそこに男性器を……

「ホワイトの割れ目、ぷにぷにで手触りいいよ。あ、もう、動いちゃダメ」

「な、何を！？」

がっちりと腰をつかまれて逃げることもできません。

「あれー、レッドを助けるんじゃないかなかったですかー？」

「うっ……」

「まあ、いきなり処女膜を奪うって程ひどくないから安心してね」

「うんうん」

「それで、何をすれば……ん、い、いいのですか？」

「やることは簡単。ホワイトさんには連続100人又きにチャレンジしてもらいます」

「……ひゃ、100人抜きですか？ ええっと、戦闘は苦手ですが……」

「違う、違いますー。100人又き。つまり、おちんちんをシコシコしてザーメンをビュッビュッて出すこと」

「お……え、ええ！？」

「時間制限は無し、あ、100人又きって言ったけど、上手くやればたぶん100人よりは少なくて済むと思うよ？」

おぞましい提案ですがやるしかありません。レッドさんのためです。

あの時、お二人は気づいていませんがレッドさんの首輪から火花が散りました。装置の故障でレッドさんの超能力の封印が消えていれば……か細い希望ですが、レッドさんの目が覚めるまで時間を稼がないと。

「ザーメンはそのコップにあふれるまでね」

「え」

そう言つて、ピンクさんが指したのは私が持っている”神器”、聖玉の錫杖……！？

「まあ、2、30人分で大丈夫じゃないかな。改造人間だしみんないっぱい出るように調整されてるから楽勝だよ。ホワイトのそのおっぱいならすぐ出しちゃうよ。なんなら、口とか脇とかいろいろ使ってもいいし」

「口！？ 脇って……い、いえ、そんなことよりも”神器”に、だ、ダメです！？ これは……」

”神器”は”神”に認められた証として直接授かった”神聖”なもので……そんな、汚らしい行為に使っていいものではありません。

「ま、それなら。レッドはすぐ洗脳して……うん、レイプ好きな痴女人格の変態さんにしちゃおうかな？」

「ふふふ、正義の味方のリーダーが真昼間に全裸で通行人をおチンポ目的で襲うって……あ、もともと裸みたいな姿で街中出たから痴女なのは最初からか」

「つぐ、いえ、でも……」

「ほらほら、この装置のボタンを……」

「わかりました！」

「んー、聞こえないよ？」

「ひゃ、100人ヌキ、挑みさせてください」

「おちんちんをシコシコしてそのザーメン入れにあふれるまで注がせてください。だね」

「お、おちんちんを……シコシコして、こ、この”神器”に……あふれるまで注がせて、下さい……」

「んー、ちよつと違うけどまあいいか。その”神”様からもらったたいせつなたいせつなガラスコップにくっさーい怪人精液満杯にしたらホワイトの勝ちでいいよ」

「う、うう……」

「もー、私たちが悪いことしてるみたいじゃない……」

「ノノ、ボク達悪の組織の怪人だよね？」

「あ、そうだった」

「わ、私が勝ったらレッドさんを解放してもらいます！」

「お、復活した。でも、ちよつとそれはわがままじゃない？」

「まあ、いいんじゃない？ 洗脳しなくても人間オナホ兼ミルクサーバーになっちゃったレッドじゃ何もできないでしょ？」

「それもそうか」

「や、約束です」

「うん約束約束。というわけで、さっそく準備しようか」

「きゃー！？ え、な、何を……」

「え、100人ヌキの準備だよ？ あ、説明の途中だったよね。ホワイトはこの中腰のポーズでこれから入ってくる量産タイプの雑魚戦闘員さん達のおちんちんをヌキヌキしてくんだよ？」

「それで、もし耐え切れなくなつて足を崩したら……ずっぽつて、そのままボクに処女を食べられちゃうわけ」

「そ、そんな！？ 聞いて……」

「えー、説明の途中で遮ったのはホワイトだよ？ はい、それじゃあスタート」

「つく……」

ピンクさんが1回手をたたくと部屋の入り口が空いて10人の黒ずくめ、オプト・ムーンの一般戦闘員ですね、が入ってきます……

「きゃー！？」

「おちんちんを又くって話したでしょ？ 手間を省くために最初から出して勃起した状態で準備してあげたのに、悲鳴を上げて被虐心をそそらせてくれるなんて……サービスいいよ。さすが聖女様、あはは」

戦闘員の皆さんの股間にある、男の人の……あまりにもグロテスクなあれを見て顔が真っ赤になってしまいます。しかし、ここで逃げるわけにもいきません。

「あ、そ、それでは、ん、こ、こうですか？」

「えーっとそれは握ったというかつまんだ？ もう、もっとうシコシコ、シコシコ激しく前後にこすってあげないと」

「ひゃ、ん、あ、熱い……ん、ん、ふあ、うう……」

「もっと、優しく、激しくしないと、あと、手だけじゃなくていろいろ使わないと時間足りないよ？」

「え、いろいろといわれましても……どうしたら」

「この雑魚戦闘員は人格無し of 半自動モードだから、エッチなお願ひしたら自動で動いてくれるよ。『私の身体でおちんちん気持ちよくなってザーメンいっぱい出してください』って言うてみたら？」

「は、はい。せ、戦闘員の皆さん、わ、私の身体で……おちんちんきもちよくなって……うう、ザーメンいっぱい出して下さい……え、ひゃ、なな、なんてところに！？ や？！」

私が言い終わると同時に4, 5人の戦闘員さんが近づいてきて、脇や太ももにそのおつきくなった男性器を擦り付けてきます。うう、おしりにまで、ナメクジが這いまわっているようなとても不快な感触ですが耐えないと。

「もう、自分で言うてそれは無いんじゃないかな？ ほら、最初に手コキしてた戦闘員が出そうだよ？」

「ひゃ、え、あ、はい……うう、びくびくって、だ、出すのですか？ ああ、”神”よ、愚かな私を許したまえ」

「はいはい、そういうのは萎えるから、もっとエッチな言葉であおってあげないと。あ、その戦闘員出しちゃいそうだよ？」

「きゃー？ こんなに勢いがあるなんて！！？ ああ、こぼれてしまいました……」

「まあ、半分ぐらいは入ったから次頑張れば……あはは」

これくらいで、へこたれる訳にはいきません。

「うう、だめです。精液は”神器”の中に……あ、こっちも！？」

「ほらほら、みんなビュッビュて出しちゃってるよ？ こぼれたのも手ですくって集めないと」

「はい……聖衣がどろどろに、あ、ここに出して下さい！ ふう……」

何とか皆さんから、精液を集めていきますが、だ、男性器から出していただいたそれを”神器”に受け止められずに半分くらいしか集めきれません。当然こぼした精液は足元や聖衣にべっちゃりと飛び散ってしまっています。

「がんばれ、がんばれ、あと9割くらいかな？」

「でも、早くも足の方がプルプル震えてきてるよ？ カップはボクが持っていてあげるからほら両手でおちんちんシコシコして！」

泣き言は言ってもらえません。とにかく目の前の方の男性器を……又いて精液を出していただかないと。

「あ、ありがとうございます……うんしょ、こうでしょうか？ きもちいいですか？ ひや！？ み、皆さん早く精液いっぱい出してくださいね……」

「お、もう1周したね。それじゃあ、私も混ぜてもらおうかな？」

「え、んぶ！？」

「さすが聖女様。私のフタナリちんぽお口でくわえこんで、んぐ、奥までつくと喉のところ……んはぁ」

「ん、んん！？ ふご、んあ！？？」

「ノノ、ホワイトの喉オナホールどう？」

「えーとね、さすがに改造してない普通の口だとあんまり。やっぱ、オナホール用に改造したお口の方がいい具合だよ」

関係無いです！？ といいたいですが口の中に腕ほどもある男性器を入れて抜き差しされると、何も言えません。気をしっかり持たないと、”神”の奇跡で守られている聖衣が破れるとは思えないですが……今は、レッドさんを助けるためには、目の前の男性器から精液を又いて差し上げないと。

「ん、ふう、ん、んん」

「あ、凄い、ホワイトさん必死になってお口で私のおチンポからザーメン絞り出そうと……」

あはは、そんな無様顔見せられたら興奮して、ん、お望み通りいっぱい出してあげますね」

「ん、んんんぶぶぶ！？」

「はう、具合はともかく、間拔けな正義の味方さんを汚すのはとっても気持ちいい。今まで仲間の振りをしていたの結構ストレスたまってたんですよ？ そのぶん、どびゅどびゅその唇の中に出して解消させてください。あ、飲み込んだらダメですよ？ あとで、ザーメン入れに全部入れてあげないとレッドさん助けられないですからね」

「ん、ん、ふはあ!？」

「はい、ザーメン入れだよ」

「……えほ、ん、こほ……」

「おー頑張ったね。もう半分まで来た」

あれだけ頑張ったのですが、半分。足がすでに限界を超えて……でも、レッドさんを救うためには……

「つ、次を……おねがいます」

「といっても、ホワイトのおくちマンコあんまり気持ちよくないしー、あ、戦闘員さん3周目だとちよつと出が悪いかな？」

「それでも……つく、」

「うーん、全部きちんと集めれば行けたかもしれないけど、残念だねー」

「もうおしまい？ ホワイトの処女食べちゃってもいいの？」

「まあ、まあ、さすがにこれで終わっちゃうのもかわいそうだし、ちよつとルール追加しちゃうけど受ます？」

口の中まで精液で汚れて、”神器”を汚して、聖衣もどろどろで、ここまで頑張つて全部無駄にするわけにはいきません。まだ、心が折れなければ光は見つかるはずです。

「は、はい」

「それじゃあ、これを注いであげるからザーメンと合わせて満杯になったらホワイト達の勝利ということで」

「それは……」

「そ、レッドの初母乳。搾りたてのほかほかだよ？」

ピンクさんが先ほどレッドさんから搾乳した、レッドさんの……母乳が入った容器を持つてきました。見た目は普通のミルクなのですが、あの光景を見た後では邪悪な何かに思えて直視できません。

「それでいいなら、お、お願いします」

限界を超えた足の震えから声を上ずってしまいます。ピンクさんの顔から何か企んでいるかなんて考えもできずに催促してしまいました。もう限界で……後、数分だけでも。

「もちろん、ただでとは言わないからね」

「あ、う、もう何でもいいので早く注いでください!？」

「えー、またあとでごねないでね。とぼとぼと……はい終わり。うんちようど満杯だね」

ところどころどろりとした固形物があるそれをさしてピンクさんが笑います。私としては早く全部捨てて浄化したい気持ちなのですが……

「い、これで……」

「それじゃ、一気いってみよう!」

「え」

「うん、追加の条件だよ? 器は満杯になったからレッドは解放してあげる。でもね、なんでも受けるっていったよね」

「う、うう、はい……」

「ふふ、簡単だと思うけど、どうしたの? ビールの大ジョッキ1杯分の仲間の母乳と敵の精液のくっさーいスペシャルカクテル。飲み干さないこのままだよ。処女をくれるって言うなら歓迎だけどね」

目の前にある異臭を放つ白濁のもの、それを飲み物とは認識できずに思考が止まってしまいます。でも、これを持ち越えれば……”神”よ見守っていてください……

「……つぐ」

「あ」

「え」

ずっ、ぶつつ……早く飲み干すために”神器”を持ち替えて煽ったのがいけなかったのか、あっけなく私は足を滑らせてそのまま腰を落としてしまいました。

「あ、あ、あああ!?!」

「あーあ、惜しかったね」

現存する兵器でも何も通さないはずの聖衣はまるで濡れた紙のように抵抗なく突き破られて、そのまま私の、処女膜も貫かれ……

「そそんな、貫けるものなんて……」

「ごめんねー、ホワイト達との戦いのために”神”をも食い殺した幻獣の種をボクの中に入れたんだ。さっきの戦いでは使うまでもなかったけど、うん、役に立ってよかったよ」

ああ、あああ!?! 消えていって、”神”の、いつも日向のぬくもりのように降り注いでいた”神”の存在が……

「そ、そんな!?! ”神”よ……あ、あああ、行かないでください、だめ、あ、あ、あ……」
体中の血の気が引いてまるでそのまま死んでしまうような喪失感。ああ、”神託”を頂いたのに守れなかった私が悪かったのですか。お願いですから……

「あ、あ……」

「うん、それじゃあもういいよね？」

耳元でブルーさんが何かささやきましたが、遠くの会話のように耳に入りません。

「さんさん、お預けされてたけど、やっとホワイトの瞳の中いっぱい犯してあげれるね。えい！」

「んひい！？」

お腹の中を何かが通り抜けていったような衝撃に、あれは私の声？

「あ、そうそう、これまだ全飲んでないから」

「え、んぶ！？ ん、ごきゅ、ん、んん……ん、ぷっはあ！？」

あれ、え、あの汚水を全部飲まされてしまったのですか……ああ、もう何も感じないです。ブルーさんが何かしてるようですがそれも……

「あは、ホワイトの中とっても気持ちいいよ？」

「……び」

「び？」

「んひい！？」

急に切れていた感覚の全部のスイッチが入ったような衝撃で言葉ではない声が漏れてしまいました。え、！？？？？？

「ひや、んぶ！？ な、にや、にやんですか！？ こ、ん、ひああ？！？ これえ？！？？」

「あはは、ホワイト、おっぱいからミルク吹き出てる。愛液もまるでじょうろみたいに、おもしろーい」

「んあ？！ あひい？！？？ ん……お、あ？……あれ？ はあ、はあっ？、ふあっ？！？」

「ノノの洗脳ザーメンとレッドの洗脳ミルクのミックスジュースだからね。加護のなくなったホワイトには強烈だったみたいだね」

「せ、しえんのう、みるく！？ え、んひい？！」

「どう、今なら完全に催眠洗脳にかかっているからおチンポもザーメンも大好きな変態さんに洗脳されちゃってるかな？」

あ、あ、ああ、しゅごい！？ ”神”の加護のイメージが日向の温かさだとしたらこれは体の中全部が燃えてるみたい。痛みはありません、ただただ、全身が熱く足の先から頭のとっぺんまで、幸せ？ そう、幸せの洪水が……

「あはは、気持ちいです！ もっと、もっといっぱい私の中をブルーさんのおちんちんでついでください！」

「うん、完全に催眠洗脳が効いてるみたいだね。ホワイトのおまんこもザーメン欲しそうにキュツてしまつていい具合になつてるよ」

「ひゃい！ あ、あゝ、ああっつる！　こんなの、こんなに気持ちいいの初めてッ！　あ、あははははるる」

「ふふふ、もうすっかりおチンポの虜だね」

「はいっ！ 男性の方の、おちんちんがこんなに素敵なものだったなんて」

「これなら、もう”神”様いなくても大丈夫だね」

「あ、んひゅー!? あ、ああ、はい、もう”神”はいりません、ん、あ、あ、あ……おちんちんだけあれば、ん、私幸せですー!」

「良く出来ました。ホワイトさん、ホワイトさんの痴態見てたらこんなになっちゃった。大好物でしょ？ 遠慮なく味わってもいいよ？」

「あ、んはう。あああ。なんて素敵な匂い……すんすん、ん。ちゅ。このあじ。ちゅば、んちゅ。ああ。レッドさん、こんなおいしいもの頂いてたなんて、ずるいです」

突き出されたピンクさんのおちんちんに顔ごと擦り付けて匂いを楽しみます。ねっとりとした先走りの液体を吸い取っておちんちん、全部を味わいます。

「あはは、ホワイトもくっさいおチンポの良さがわかるようになったんだね」

「ふあ、ん、はい、ああ、いつまでも嗅いでいたいとしてもエッチな臭いで、ふあ、あ、匂いだけでイチャイそうです」

「それじゃあ、これから”神”様じゃなくておちんちん様に仕えるの？」

「え、あ、おちんちん様……はいっ！ わたしこれからはおちんちん様に仕えて、ご奉仕して、気持ちよくなってもらって、びゅつびゅつていつぱいザーメンごちそうになりたいですっ！」

ブルーさんのおちんちん様に突き上げられるたびに体全てが喜んで、こんな素晴らしいものに気づけなかったなんて今までなんて不幸だったのでしょうか。

「それじゃあ、ホワイトもジュエル・スターズ裏切つてオプト・ムーンの怪人にならないとね」

「は、え、でも、レッド、んん!? あ、あ、ああ!?」

「あ、ホワイトがうるさいからレッドが起きたみたい」

「え、あ、んあっ♡♡!？」

「つぐ、
氣を失って……え?!」

「ほら、ホワイトさん、レッドさんに別れの挨拶しなきゃ」

「え、ひう♡!? ひゃ、ひゃい♡♡!?」

「ホワイト！？ 貴様ら何を！？」

少し離れた場所でこつちを見てるレッドさん、ああ、そうです、挨拶をしないと……

「あ、す、すみません、レッドさん。わたし、ん、頑張ったんですけど……ん、ふあ、だ、ダメでした」

「つく、そんな……心しつかりもつんだ！」

ああ、レッドさんの声が、とても遠くに聞こえて、ふふふ、あんなに心配してたはずなのに……

「あ、あ、あああ……！ あはは、でも、いいんです」

「ホワイト！」

「だって、こんなに気持ちいいこと知らなかった。もう、戻れませんか」神”にも見捨てられませんでしたし……もう、おちんちん様だけあれば私、幸せなんです」

「だから、いっぱい洗脳して改造してブルーさん達と同じドスケベなメス奴隷にしてください」

「あはは、振られちゃいましたね」

「ふあ、ん、いいの？ もう戻れないよ？ 特製の改造ウイルス植え付けちゃって、ボクみたいはどうぶつにしちゃうけどいいんだね？」

「はい！ おちんちん様にいっぱい仕えられるように私の全部改造してください」

「マリア！！」

「あー、あれはもう聞いて無いね。うん」

「それじゃあ、頂きます」

かぶつと、肌にブルーさんの牙が突き刺さります。私の子宮に突き上げる衝撃に比べるととても小さな痛みの後、全て書き換えられて、私は生まれ変わらせてもらいました。もう必要のない聖衣は消え失せて、頭、背中、腰に、これは蝙蝠の羽？ ああ、なんとなくどう使うものかわかります。ふふふ、奇跡は使えなくなりましたが代わりにピンクさんのような魔法が使えるみたいです。お試しに黒く煽情的な肌着を召喚してみます。裸でははしたないですから。おちんちん様の前ですし、ご奉仕に適した姿を保たないと失礼です。

「……ん、ふあ、ああ、すごい、これが、わたしなんです」

「ん、あ、ホワイトの中！？ 急に締め付けが……あ、ああ、いっぱいでちゃうよ」
「サキュバスというものでしょうか？ ブルーさんのなかの種がいくつか私の中に入っておちんちん様にご奉仕するのにぴったりな形に変化したのが分かります。今なら膣内を自分の手のように自由に動かせますし、お口の中のように味もきっちり楽しめます。」

「ああ、ブルーさんのザーメンが子宮を犯そうとどぶどぶ中にあふれて、ん、美味

しい。あはは、ありがとうございます。こんな幸せがあったなんて……」

「すまない、ホワイト……」

「ふふふ、私とっても幸せなんですよ？ あ、でも、もつといっぱいおちんちん様でずぼずぼ突いてくださいまし。さつきみたいに、ザーメンいっぱい浴びるぐらいにおチンポに囲まれます」

そう言いながら、私は愛おしいおちんちん様に感謝のキスをして、おねだりをしました。